

『吉原恋情譚』

九谷六口

人物

常吉 …… 大店の跡継ぎ
小雪 …… 女郎
梅 …… 禿

二〇一〇年一月四日（改）

○吉原・全景（夜）

大門から仲の町が見える。

その両脇には、灯りを煌々と点けた引手茶屋の家並が見える。

○揚屋「三浦屋」・全景（夜）

格子越しに女郎たちが見える。

籬まがきの前には、武士や町人の男達が群がっている。中には、吸付煙草すいすけを喫いながら真っ赤な顔の浅葱者あさぎものもいる。

(1)

○同・部屋・中（夜）

常吉が赤い襦袢を羽織り、布団の上で

下帯を露わに胡坐を掻いている。傍に

桃色の襦袢の前を肌蹴け、片腕に頭を

乗せた小雪が、気だるそうに横たわっている。

小雪「常さん、もう五日、あちきは嬉しくありません

が……このままでは良くないのでは……」

常吉「何が？」

小雪「家を追い出される……」

常吉「五月蠅うごせな。跡取りは俺一人だ。勘当わかけされる理由わけがねえだろう」

小雪「少しは商いに精を出した方が……」

大店を継ぐ身でありんしょう」

常吉「余計な事を言うんじゃねえよ」

小雪「でも、このままじゃ身上しんじょう潰つぶすに違い

ありません。揚代は一両三分、店の者には

祝儀。常さんは気前が良すぎるんじゃござ

んせんか。一日に十両や二十両、平気で」

常吉「馬鹿野郎！ 女郎が銭の話をするん

じゃねえよ」

小雪「常さん、以前のあんたに戻ってください

んし。言葉遣いだって……馴染みになった

頃は、お洒落な話しっぷりだったではあり

んせんか。どう見たって歌舞伎者だよ」

常吉「良いじゃねえか。どうせ親父と番頭た

ちが一代で築いた店だ。俺が遣る事なんて

ねえんだよ。高いなんて嫌いだ」

小雪「甘えてるだけでありんす。エエとこの
ボンボン、丸出しじゃござんせんか」

常吉「なにッ！ てめえだって男と寝るだけ
じゃねえか。楽しみやがって」

小雪が常吉ににじり寄り、引ッ叩く。

常吉「何をしやがる。大人しくしてりゃ好い
気になりやがって」

と立ち上がり、小雪の襦袢の衿を挿ん
で立たせ、右腕を振り上げる。

小雪「面白いやありませんか。さあ、殴っ
ておくんなんし。大声は上げんせん」

二人が睨みあう。常吉の腕が、力なく
下がっていく。

小雪「あちきが好き好んでこんな商売遣って
ると思ひんしたか。馬鹿言っちゃいけない
よ。あちきが身売りでもしなけりゃ親兄弟
五人が飢え死ぬだけ……」

常吉が、小雪を見詰める。

小雪の目から大粒の涙が零れ出し、
布団の上に泣き崩れる。呆然と見てい
る常吉。小雪が体を起し、鏡を見る。

小雪「顔が、滅茶苦茶になりんした……。

あちきは風呂に……。常さんは？」

常吉は胡坐を掻き、頭を横に振る。

小雪が部屋を出て行く。

常吉が煙草盆を引き寄せ、煙管に煙草を詰め、吸い口を銜えて火入れに持っていく。二度、三度喫うが火が点かない。

常吉「おい、誰かいねえか」

梅が部屋に入ってくる。常吉が雁首で火入れを叩きながら、

常吉「埋め火が消えてんだよ。ちゃんとしなきゃ駄目だろう」

梅が煙草盆を持って行く。すると、

常吉「何、遣ってんだよ。熾火を持ってくりゃ良いだろうに」

梅「近頃……怒ってばかり……小雪姐さんが可哀相。常様の事、大好きなのに」

常吉は梅を睨んでいたが、寂しそうな顔になり俯く。

ジャンジャンジャンと平鐘の音が聴こえる。

梅「火事！ 常様、逃げて」

と部屋を出て行く。

ドタドタドタッと足音がして、浴衣を

羽織り前を肌蹴た小雪が部屋に来る。

小雪「常さん、逃げておくんなんし！」

常吉が小雪の腕を掴み、一緒に部屋を
出ようとする。

小雪「何、這っておりんすか！ あちきたち

女郎は、此処から出られんせん」

常吉「馬鹿野郎！ 火が廻りゃ、焼け死ぬ

だろうに。一緒に逃げるんだよ！」

小雪が、寂しそうに、

小雪「病気ん時と、死んだ時だけ……。

此処から出られるのは……」

常吉が、小雪を穴の開くほど見詰めて、

常吉「……俺も残る」

と小雪を抱きしめる。二人が座る。

小雪「あんさんも馬鹿でありんすねえ。どう
なっても知りんせんよ」

外から怒鳴り声や、騒がしい音が聴こ
えてくる。

小雪「人間なんて悲しいものでありんす。あ
ちきだつて真面な人生を送りたかつた。常
さんみたいな優しい人と夫婦めづになつてさ」
常吉「……」

小雪「ねえ、商いが嫌いって言つておりんし
たが、常さん、あんた何か遣りたい事でも
ありんすか」

常吉「(呟くように) 絵師……」

小雪「絵師？」

と云つて笑い出す。

常吉「何が可笑しいんだよ」

小雪「だって、馴染んでから半年以上経つけ
ど、絵が描けるなんて、あちきは聞いたこ
とも見たこともありません。フフ、描ける
のでありんすか？」

常吉「気に喰わねえな。疑いやがって。面白
れえや。帳場に行つて半紙と筆を持ってき
な。描いてやろうじゃねえか」

小雪「こんな時に？ 常さんは、変な人であ
りんすな〜」

と立ち上がり出て行く。

常吉は煙管を手取るが、チツと舌打
ちして放り投げる。

○同・外（夜）

火が鉄鑿溝てつさくこうの近くまで来ている。
仲の町を逃げ惑う武士や町人の姿。

○同・部屋・中（夜）

小雪が右手を畳に付け、腰を崩し、
横になっている。常吉は筆を持ち、

常吉「もっと胸元を開けるよ」

小雪「何で？」

常吉「乳が見えねえよ。良いか、片っ方の乳
は、ちゃんと見せてくれ。もう片っ方は
半分隠すんだ」

小雪「そんな……。恥ずかしい……」

常吉「何を今更。生娘じゃあるまいに」

小雪「常さん、それとこれとは別でありんす
よ」

顔を見合わせ大声で笑い出す二人。

○同・外（夜）

紅蓮の炎が廓に近付いている。

○元の場所（夜）

畳の上に何枚もの絵が置かれている。

小雪「嘘じゃなかった……」

常吉「当たり前よ。好きこそ物の上手ってな。俺は絵を描くのが大好きだ。だがな、絵を見せるのは…… 小雪、おめえが初めてだ」

小雪「嬉しい事を……。この女……（ちよっ
と間を置いて）女のあちきが見ても、涎が
出るほど艶っぽくありません」

常吉「相変わらず馬鹿言ってるやがる。何が
この女だ。全部、おめえだよ。いつか描き
てえと思っていた。こんな時だが、もっと
描きてえよ」

小雪「……」

常吉「もしもだが、助かったら……」

小雪「何でありんしょう。勿体振って……」

常吉「身請けする」

小雪「エッ！ 身請け！」

驚いた顔を急に崩し、笑顔になって、

小雪「もしかして、もしも……。あちきも

ねえ、小さい頃から、もしも、もしもっ

て、色々考えておりんした。みんな駄目で

ありんしたが……」

常吉「身請けされるのが嫌なのか」

小雪「嬉しいに決まっているじゃありません

か。もしも常さんと……なんて何遍考えた

事か。ふふ、もしも助かったら身請け……

良い響きじゃありませんか」

小雪が寂しげに俯くが、ふと顔を

上げ、

小雪「どうせ駄目でありんしょうが……。

ねえ常さん、身請けなんて粹がつておりん

すが、常さんにはお金がありません」

常吉「親父はな、お前は跡取りだ跡取りだ

と口を酸っぱくして言ってるがな、俺が

商いに向いてねえ事を知ってんだよ。俺が

継ぎや、店は潰れる。互いに良くねえ

ことだ

小雪「……」

常吉「最後の親不孝をさせてもらう。だが
な、今度は貰うんじゃねえ、貸してもらう
んだ。絵を描いて返す」

小雪の顔から笑みが消え、真剣な顔
付きになる。

小雪「常さん、本気で……」

常吉「……」

小雪「もしも、もしも、そうになったら……」

小雪の頬に、涙が細い筋になって
流れる。

小雪が畳に手を付けて絵を眺める。

常吉も一緒になって絵を見る。

部屋の外からドタドタと足音が聴こえ
てくる。

部屋の障子が乱暴に開けられる。

其処に煤だらけになった、梅の顔が
ある。

梅「(大声で) 鉄漿溝の手前で火が止まり

ました。姐さん、常様、火が、火が消えま
したよ！ 火事が治まりました！」

常吉と小雪は、梅の方も見ずに絵に魅入っている。

ボカーンと、二人を見ている梅。

窓から眩しい朝日が差し込んでくる。

了

(11)

インデックス・ページに戻る。